

## 解説



### 文脈理解—文脈のための言語理論†

田 窪 行 則††

#### 1. はじめに

生成文法をはじめとする文法の理論が、文中の要素の依存関係をおもに取り扱い、文脈の問題を捨象して理論を立てているため、言語理論では、文脈の問題が軽視されている印象をもつ人も多いかも知れない。しかし、コミュニケーションとしての言語を考える言語研究は、すべて文脈理解の問題を扱っているといつてよい。いわゆる機能主義的接近法をとる学者たちがそれで、代表的なものとして、Halliday<sup>1)</sup>、Kuno<sup>2)</sup>、などがあげられるであろう。また、最近の多くの日本語研究は、まったく機能主義的なものである<sup>3),4)</sup>。彼らは、言語構造は、コミュニケーションの手段であるという言語の機能によって決定されると考える。

最近では、意味論、語用論が盛んになってきたことから、言語理解における非言語的知識や推論操作に言語学者の関心が向けられてきている<sup>5),6)</sup>。さらに、文をこえたテキストの理解を目指すアプローチでは必然的に文脈理解は重要な位置を占める<sup>7)</sup>。また、最近、これまで無視されてきた *well, you know, oh*、「ええと」、「あの」、「さあ」、「まあ」といった表現が談話構造や共有知識の標識として注目を集め、談話情報の管理理論という新しい分野をひらいたりしている<sup>8)-10)</sup>。

したがって、文脈に関する言語学の文献は膨大で、とても全貌を紹介できるようなものではないが、最近の研究から、文脈理解のための言語理論がもつべき性格、あるいは、目指すべき方向に関しては、ある程度の収束がみられるようである。それは、言語の主たる機能は真偽を問題にするのではなく、情報を伝達するものであること、また、伝達される情報は、世界すべてに関するものではなく、世界の部分的な状態に関するものであること、言語は、外部世界を直接指すのではなく、言語自体の世界をつくり、その世界が外部と

交渉をもつことなどである。さらに、文脈理解、ひいては言語理解を統合していく談話情報管理者としての話し手の役目がこれから重要になると思われる<sup>11)</sup>。現在、注目を集めている状況意味論<sup>12)</sup>、relevance 理論<sup>13)</sup>はこの方向にあると思われる。ただ、これらは、一般論を示しているだけで、今のところ、言語学的な一般化を達成しているとはいいがたい。可能な言語間の差異を原理的にとらえていないからである。

本稿では、発話の意味を文脈に対する情報付加であるとする手続き意味論的な接近法にもついた局所的領域の理論を概説して、文脈理解のための言語理論が進むべき方向を模索してみたい。

ここでは、問題を主として対話の場合に限る。これは、日本語と他の言語との文脈依存性の違いに焦点をあてたいからである。非対話的な文脈は、この対話の文脈から聞き手の果たす役割を希薄にすることによって得られる。

#### 2. 文脈とは

文脈とは、ある言語表現の使用される、言語的・非言語的環境のことである。この使用環境が個々の言語表現に対してもつ機能は、二つの観点から考察できる。一つは、文脈が言語表現の使用意味の算定に対しどのような機能を果たすかである。いま一つは、言語表現自身が、そのおかれている文脈に関する情報をどのような形でもっているかである。この二つの視点は、相互補完的な役割を果たす。

自然言語は非常に曖昧で多義的であると普通考えられている。しかし、実際上は、多くの場合、コミュニケーションに支障を感じていないことから分かるように、それほど曖昧でも、多義的でもないといえる。これは、われわれが自然言語を用いてコミュニケーションをする際、辞書・文法に関する知識や一般的知識をすべて運用しているのではなく、これらに対話相手やその時の話題に特化したシステムに調整して使っているからである。単純な例を考えれば、人名をいってあ

† The Role of Context in Linguistic Theories by Yukinori TAKUBO (College of Liberal Arts, Kobe University).

†† 神戸大学教養部

る特定の対象を指すためには、名前と対象との引き当てが必要になる。ところが、実際の対話では、まず、相手の知識を想定し、これに話題による領域の限定を行ったりして、非常に狭い探索領域を設定するので、それほど苦勞せず、名前によって対象が一義的に同定できるのである。さらに、重要なことは、対話は、白紙状態で行われるのではなく、対話によって創出されるテキスト自体もそれまでに共有されている知識に付け加わるということである。情報交換を目的とするコミュニケーションでは、話し手は、聞き手との間に共通に利用できるデータベース（これは記憶と現場の認知からなる）を想定し、そのデータベースの更新という形でコミュニケーションが行われる。こうした部分的調整が行われるのが、対話の場である。

話し手は、自分が想定するこの聞き手との共有知識にどのような情報を加えれば聞き手の知識構造にどのような変化が生じるかを算定しながらコミュニケーションを行っている。この際、共有知識のあるものは、あたかも明示的に表現されたものと同じように働く場合がある。したがって、その部分は、言語的に表現される必要はなくなり、省略される。これに対し、聞き手は、相手のいったことをこの共有された部分との相関で解釈する。つまり、よく指摘されているように、発話は省略的性質をもち、解釈は補完的性質をもっているのである<sup>14)</sup>。

具体的な対話では、解釈は限定された領域を探索すればよいので、それほど困難なく適切な解釈に到達できる。そこで、一般的には、このような領域依存的な下位システムが一般的なシステムからどのように作成されるのが問題となる。言語学的には、これは、言語自身がこのような探索を効率化するためにどのような装置を内蔵しているか、また、その装置はどのように言語間で異なるのか、という問題としてとらえることができる。文脈理解のための言語理論が存在するとすれば、言語自身がもつこの文脈理解装置の性質を研究しなければならない。

言語理解における文脈の果たす機能は多岐にわたるが、ここでは、共有されるデータベースがいかに構造化され、解釈を限定する領域の局所化のシステムが言語においていかに表現されているかをみることにする。

### 3. 文脈の構成要素

上で文脈を言語表現が使用され、評価される言語

的・非言語的環境と定義したが、この環境の構成要素がどのようなものかをみてみよう。

対話では、自分のもつ知識を加工して、特定の相手を想定した領域依存的モデルを作成する。これに現場の要素を加えて、共通の知識状態を作り、その共有状態を基準にして、前提できる内容、話すべき内容を決める。つまり、話しはじめるまえに、かなり多くの具体的な状況や知識を前提にしているわけである。これを対話の初期状態と名付ける。発話は、この初期状態を順次変化させる関数と考えることができる<sup>11), 15)-18)</sup>。

(1) 一般的データベース→話題および相手に特化したデータ  $E$

$E + \text{発話現場の要素} \rightarrow \text{談話の初期値 } S_0$

$U_1(S_0) = S_1$

$U_2(S_1) = S_2$

$U_i(S_{i-1}) = S_i$

初期状態  $S_0$  は、対話の最初の発話  $U_1$  に対する文脈を構成する。 $U_1$  は、この文脈に  $U_1$  という情報を加え、新しい文脈  $S_1$  を作る。この  $S_1$  がさらに次の発話の文脈となる。したがって、ある発話  $U_i$  の文脈とは、 $S_{i-1}$  の状態（およびそれまで形成されたテキスト）ということになる。 $S_{i-1}$  は、発話の現場の要素と共有知識からなるので、文脈は次の要素の状態からなる。

- (2) a. 発話の現場：{話し手、聞き手、現場の事物、発話そのもの、発話のとき、発話の場所}  
 b. 共有知識：{発話時に話し手が想定している聞き手の知識}  
 c. 発話によって構成されたテキスト

文脈とは、これらの構成要素がすべて具体的に定まった一つの状態である、ということになる。また、この  $S$  の状態はすべて話し手が想定するモデルである。したがって、ある発話  $U_i$  が評価される文脈  $S_{i-1}$  は、話し手が想定する共有知識内の知識状態である。

以下の章で、この文脈のうちおもに a と b がいかに局所的領域に構造化されているかをみる。

## 4. 局所的評価領域としての文脈

### 4.1 発話現場の構造化と検索領域標識としてのダイクシス

発話の現場の状態の共有認知が言語表現にどのように反映されるかをみてみよう。発話の現場は、話し手、聞き手、現場の事物、発話そのもの、発話の時

点、場所、からなる。

「私、僕、おれ」や「あなた、君、おまえ」などは、具体的な発話の場面における解釈を経なければ値を決めることができない。これらは、話し手、聞き手という、発話の場面での役割を、変数として表すと考えられる。具体的な言語場が与えられると、その値が個体値として決まるわけである。「こ、そ、あ」などの指示詞、「いま、きょう」などの時の副詞も同じである。このように具体的な言語場が与えられてはじめて、値が決まる表現をダイクシス表現 (deictics, deictic expressions) という。

これらの要素のうち、話し手と発話の時点の認知は単純である。聞き手がだれなのかは話し手が決定するので多少の誤解が生じる場合がある。さらに、これには、もう一つ問題がある。複数形の話し手（「我々」）では、話し手が聞き手を自分と同じ視点をとるものとして認知しているのか否か、つまり、「我々=私+あなた」なのか、「我々=私+彼」なのかで、違いがある。前者は融合的視点、後者は対立的視点と呼ばれている。この視点の違いは、現場の事物、場所、発話の認知の仕方に影響を与える。

次に、話し手と聞き手以外の要素を考えてみよう。現場の事物、場所は、話し手に近いのか、遠いのかで分類される。たとえば英語では、話し手に近いものは近称の指示詞 *this, here*, 遠いものは *that, there* で指される。日本語でも独り言や、融合的視点では近称（「こ」系列の指示詞）、遠称（「あ」系列の指示詞）しか区別しない。

さらに、日本語では、話し手から遠いものは、聞き手に近いのか否かによっても分類される。日本語では、遠称が、聞き手に近い部分（「そ」系列の指示詞）と話し手からも聞き手からも遠い部分（「あ」系列の指示詞）にさらに分解されているわけである。ここでいう遠近は、物理的な遠近というより、支配領域の内（＝近い）か、外（＝遠い）かといったものである。つまり、日本語では、聞き手の支配領域が独立して認められているのである。

指示詞の構造は、発話の現場という文脈構成要素の言語的表現とみることができる。話し手が、言語表現により現場の要素を指示したとき、聞き手は、その要素を現場で探索するわけであるが、その際、現場が領域に分割されており、かつ、言語表現にその領域の標識がついておれば、探索すべき領域が限定され、探索の効率を増す<sup>19)</sup>。指示詞は、前もって分割された領域

を示す指標とみることができるのである。

この現場における話し手・聞き手の領域の区別は、現場以外の他の知識においても反映されていることが広く指摘されている<sup>20), 21)</sup>。

#### 4.2 局所領域としてのメンタルスペース

前章で、言語表現の値を探索したり、設定したりする領域の概念を提出した。これは、現場の要素をモデル化したものである。重要なことは、現場自体は一つであるにもかかわらず、このモデルが、一つではなく、立場の違いを反映する複数のモデルが同時に作られ、その上で言語表現が位置づけられるということである。つまり、現場で自分の近くに「本」があるとすると、この本を指すのに、自分は「この本」、相手は「その本」というように言い分ける。そして、自分は、相手が「その本」といった場合「この本」を指していることが分かる。

また、これとは少し違った探索領域もある。たとえば、「ミス日本」などのような語は、年によって値が異なる。したがって、この語は、年を変域とし、特定の人物を値域とする関数と考えることができる。「大統領」は国と任期（時間）、「作者」は作品等によって決まる<sup>14)</sup>。

- (3) a. ミス日本(1989) = 田中花子  
b. 大統領(アメリカ, 38代) = フォード  
c. 作者(源氏物語) = 紫式部

これらの語には、「今年のミス日本」、「アメリカの大統領」、「この小説の作者」のように、値が評価される領域を言語的に明示することができる。このようにみれば、「今年」、「アメリカ」、「この小説」は、これらの表現の指す対象を探索すべき領域、あるいはこれらの表現を定位すべき領域を示す言語的手段として解釈することができる。さらに、注目すべきことは、これらの領域は、ある基準座標からみた距離として定義できる座標点として考えることができるということである。基準座標は、文脈の状態により設定されるデフォルト値である。たとえば、「アメリカの大統領」は、「現在のアメリカの大統領」としなければ特定の個人を明示することはできないが、特に過去のアメリカ大統領と比較するものでなければ「現在の」をつける必要はない。また、話し手がアメリカにいる場合には、「アメリカの」も必要ない。つまり、過去や別の国の大統領を問題にするとかして、別の評価座標を導入するものでなければ、単に「大統領」によって「現在のアメリカの大統領」を指すことができるのである。

そこで、発話のある時点で基準となる座標が存在し、それに依存して、別の評価領域が設定されることが分かる。この領域を特徴づける座標軸は、時間、場所、特定の話題の文脈、テキストにおける位置、自分や他人の信念世界などである。

Fauconnier<sup>22)</sup>はこの局所的評価領域をメンタルスペースと名づけ、その構造依存関係の理論を構成している。彼によれば、メンタルスペースとは、言語と世界との間の認知のインタフェースで、「要素および要素間に成立する関係からなる構造をもつ増加可能集合」と定義され、談話において設定され、その進行に従い変化する。

われわれは、さまざまなものに関して膨大なデータを有しているが、これらを情報として聞き手に伝えたりするとき、聞き手も利用できる認知インタフェースを使用して、まず、領域の局所化を含む、情報の構造化を行うと考えられる。いわば、高度化された知的データベース管理機構である。メンタルスペース理論は、この認知インタフェースのうち、データファイル作成および管理に焦点を当てたものと考えてよい。メンタルスペース理論における個々のスペースは、構造化されたデータファイルあるいはそれらのデータファイルを含むディレクトリのようなものと考えればよい。スペース間には半順序関係が定義され、これを包含関係  $\supset$  で表すが、スペース間の包含関係は、集合間の包含関係ではなく、コンピュータのオペレーティングシステムの階層ディレクトリにおける、ディレクトリの上位下位関係のようなものとしてみるべきである。したがって、あるスペース  $R$  が別のスペース  $Q$  を含むとき、 $Q$  の要素が、 $R$  の要素以外の要素を含んでいてもよい。このようにして設定されるスペースは、対話において、データを探索すべきファイル（あるいはディレクトリ）、あるいは、データを設定すべきファイル（あるいはディレクトリ）としてみる事が可能である。

さて、文法構造の中には、これらのディレクトリやファイルの名前を指定するものが含まれている。上記の、「アメリカの」、「現在の」などの語がそれにあたる。これをスペース導入表現と呼ぶと、スペース導入表現は、フレーム的知識により、ファイルの設定と構成の仕方の指令をするものとしてみる事ができる。

たとえば、われわれは、鏡や夢が現実とある構造的対応関係をもっていることを知識として知っている。したがって、「鏡では」、「夢の」、「10年前」といった

スペース導入表現は、鏡、夢、10年前といったファイルを開くとともに、その現実との対応関係もデフォルト値により、指定される（鏡の場合は、鏡像をなし、現実のほぼ忠実なコピー、絵の場合は、種類により現実の反映の仕方が異なる。10年前には、現実の10年前の対応物が存在し、あるいは、存在せず、関係は変わっているものも、そうでないものもあるなど）。これらの対応関係は、実際の談話では、このデフォルトの値を前提とし、その対応関係のうち、目でないもののみを話題にすることができる。

われわれの知識はこのように構造化された複数の知識空間によって分割されており、談話において導入される要素や関係はこの領域に分散して登録される。したがって、単一の領域で評価すれば、矛盾する属性も複数領域を問題とするときは、矛盾しない解釈が構成できる。

(4) 10年前には、私の妻は私と結婚していなかった。

ここでは、二つの評価空間が問題となっている。現在と10年前である。さて、カレントディレクトリは、デフォルトでは、話し手の現実  $R$  に設定されている。次に、「10年前」により、「10年前」ファイルが作られる。さて、「私の妻」、「私と結婚していなかった」がどちらも「10年前」に成り立つとすると、これは当然、矛盾した解釈となる。しかし、これらを別の領域で評価すれば問題はない。まず、 $R$  で、「私の妻」が評価され、「私の妻」である対象  $a$  が得られる。このファイル内で、 $a$  の対応物  $a'$  が設定され、 $a'$  がもつ属性として「私と結婚していなかった」が設定される。これは、矛盾した解釈ではない。ここで、 $a'$  という対象を10年前は成立していない「私の妻」という記述で同定している。これが可能なのは、次の同定原則が成り立っているからである。

(5) 要素  $a$  と  $b$  が語用論的関数  $F$  で結ばれているなら、( $b=F(a)$  なら)、 $b$  の記述で  $a$  を同定できる。

現在の対象とその対応する10年前の対象との間に、ある関数関係を定義することはごく自然である。そこで、「私の妻」という現在の  $a$  の記述で、10年前の対象  $a'$  を同定することができたわけである。これは、現実と絵、現実と鏡の像と同じである。たとえば(6)では、「太っていた」のは、「 $F$ （「私」の現実の値）=「鏡の中の私」の値」の属性である。

(6) 私は、鏡の中では少し太っていた。

また、「私の妻」が、10年前の領域で「私の妻」であった対象を指す場合もある。この場合、「現在の私の妻」と同じ対象を指さなくてもよい。

(7) 10年前、私の妻は、薬剤師をしていました。彼女とは、3年前に別れました。

さて、日本語では、「私」は義務的ではないので、10年前の妻か、現在の妻かの区別をすることができる。上で述べたように、裸の名詞句は、カレントディレクトリの要素を指す。したがって、「私の妻」のかわりに「妻」とすれば、デフォルトでは「現在の私の妻」を指すため、(8)は多少不自然になる。

(8) ?10年前、妻は薬剤師をしていましたが、彼女とは3年前に別れました。

スペース導入表現は、ファイル作成の指示としてばかりでなく、ファイルやディレクトリ間の移動の指示とみなすことも可能である<sup>16)~18)</sup>。たとえば、(9)では、「10年前」のファイルに、「現在」のファイルのデータをつけ加えている。この場合は、その移動の指令として「現在の」が付いている。

(9) 私は10年前、急におなかを痛くなって、薬局に飛び込んだ。そのとき相手をしてくれた薬剤師が、現在の私の妻である。

また、時制やモーダルの助動詞は、スペース間の移動制約規則としてとらえることができる。この場合、たとえば、(10)では、スペース導入表現 John believed により、 $R$  から、過去の信念  $B$  に移動して、Mary was a spy がこの過去の信念で成り立つことを示している。

(10) John believed that Mary was a spy.

これに対し、日本語では時制は一致する必要はない。日本語では過去の時点の移動は、一度指令をすればよい。

(11) ジョンはメリーがスパイだと思っていた。

次の文でも同じである。一度、過去の時点へ視点(=評価領域)を移動すれば、その時点での状況記述が現在形で続いてよい。この場合、状況の記述なので、状態述語がくる。

(12) そのとき、私は下を向いて山道をおもいでいた。変な声がするので、見上げると人相の悪い男が女の子をからかっている。わりとかわいい子だ。私は、いいところをみせて、なんとか彼女とお友達になろうと考えた。

#### 4.3 聞き手の機能と神尾の情報のなわばり

上で、日本語では聞き手の領域が独立しており、聞

き手の知識の状態に言及して言語形式が決まる場合があると述べた。3.で述べた評価の領域と聞き手の領域を入れた場合の、スペースの関係はどのようになるのだろう。Fauconnier ではそれほど強調されていないが、田窪<sup>19)</sup>では、聞き手や他人の信念に関わるスペースと、空間、時間といったスペースとは性質が異なることが示唆されている。

ここでは、起点となる自分の信念スペース内の構造と聞き手スペースとの関係を中心に日本語の聞き手の領域がどのような機能を果たしているかを、神尾の情報論のなわばり理論<sup>23),24)</sup>をメンタルスペース理論風にアレンジして解説する。

準備として、聞き手のいない状況を考えよう。まず、起点スペース  $R$  に、自分の認知している現実世界のモデルファイルを構成する(ここでいうスペースは、ディレクトリとファイルの両方の性質をもち、ファイルだけでなく、自分自身のデータも格納できるとする)。次に、 $R$  の中に、 $I$  というスペースを作り、 $R$  のデータから推論などによって間接的に得られた知識や伝聞によって得られた知識を入れる。また、 $I$  では、 $R$  のデータを自由に利用できるとする。データを“:”で表し、すぐ下のディレクトリを“|”で表すと次のようになる。

(13)  $R: D_1$  田中が結婚指輪をしていた。

$R|I: D_2$  田中が結婚している。

$I$  を間接的知識領域と名付ける。この世界は、まだ自分の信念に組み入れられていない、現実世界で未定の知識を含む世界である。この世界におけるデータは、 $R$  や、 $I$  のほかのデータからこの未定の知識を得る方法(推論(だろう)、伝聞(そうだ)、観察からの推理(ようだ)、単純な思い込み(にちがいない)など)によって特徴づけられる。あるいは、これらは、 $I$  の中のそれぞれ別のファイルと考えてもよい。

さて、これにより  $R$  は、ルートの部分のデータと  $I$  のデータという二つの部分領域にわけられる。 $R$  のルートの部分を直接知識領域と名付ける。 $I$  内のデータに  $R$  からアクセスするためには、「たぶん」、「どうも」、「田中によると」といった、スペース導入表現を使って  $I$  内にファイルを設定したり、「だろう」、「ようだ」、「そうだ」のようなモーダルの助動詞をつける。このような助動詞がついた形を間接形と名付ける。

次に  $R$  内に聞き手のモデル  $H$  を作成する。 $H$  も  $R$  と同じ構成をしており、 $H$  のルートの部分と間接

的知識を格納する  $I'$  とに分けられる。  $I, H, I'$  の  $R$  からの階層の度合をパスで示すと次のようになる。

- (14)  $R : D_1$   
 $R|I : D_2$   
 $R|H : D_1$   
 $R|H|I' : D_2$

話し手が  $D_1$  = 「田中が結婚している」ことを述べるとする。このとき相手を考慮にいれず述べるときは、 $D_1$  が  $R$  の知識であるなら直接形式、 $I$  の知識なら間接形式を使う。

(15) 田中は結婚している。

(16) どうも、田中は結婚しているようだ。この前、彼によく似た子と歩いていた。

これを聞き手に情報として述べるときは、 $H$  の状態に相関してさらに形式をつけ加える必要がある。まず、 $D_1$  が  $H$  にも  $I'$  にも存在しない場合は、(15)、(16)のまま、あるいは、相手に知識を書き換えよという指令として「よ」、「ぞ」をつけ加える。 $H$  か  $I'$  に  $D_1$  がある場合は、義務的に「ね」を加える。この場合、伝えられる情報は、 $D_1$  そのものではなく（これはもう聞き手も持っている情報である）、 $D_1$  を話し手も持っているという事実である。

さらに神尾は、自分の信念内での確度の標識が相手の知識によって影響を受けるということを明らかにしている。つまり、自分独りで考えるときは、直接形を使う場合でも、相手がそれについてより多くの知識もっているはずだと考えられる場合、つまり、相手の情報のなわばりにある知識には、「間接形」を使うのである。友人を彼の会社に訪ね、話していたとき、その友人の秘書が「会議がある」と知らせてきたとする。このとき、自分は、この事実を(17)のように「ようだ」のついた間接形を使って言及するであろう。

(17) 会議があるようだね、そろそろ、失礼するよ。日本語の特徴として、感情述語（「さびしい」、「悲しい」、「ほしい」など）のような自分しか判断できない心的状態を表す述語は、一人称以外では、(20)のように間接形を使うということがある。これは、日本語の直接形が自分の直接経験によって得た事実しか報告できないからである<sup>23)</sup>。

(18) 私は寂しい。

(19) \*彼は寂しい。

(20) 彼は寂しいらしい。

この感情述語の場合と同じく、(17)で直接形を使うと、事態の真偽に関して、自分が判断して決定を下し

たことになる。日本語では、相手のなわばりにある情報に関する決定権は原則として相手にあるという原則が働いていると考えられる。そこで、(17)のような状況では、自分が決定権をもつ知識でないとして間接形を使うのである。日本人の書く英語の論文に、*seem* などが多いのは、このせいだといわれる。

この現象は、次のような省略を含む文の解釈にも影響をもつ。

(21) [  $\emptyset$  会議がある ] から、帰るよ。

(22) [  $\emptyset$  会議があるようだ ] から、帰るよ。

(21)では、[ ]の部分は直接形を使っているので、これは自分のなわばりにある事態である。したがって、「会議がある」のは「私」であるとするのが普通である。(22)は、間接形であるので、この事態は自分のなわばりにはない。文脈の状態により、「会議がある」のは「聞き手」である場合と、話題に登ってきた人物である場合とがある。

このことは、日本語では、想定された聞き手の知識状態が言語形式の決定に必要であることを示している。まず、相手の知識内にあるか否かで、義務的な「ね」を付けるか否かが決まる。さらに、相手のなわばりにある知識か否かで、間接形・直接形の選択が影響をうけるのである。

英語や中国語では、これほど聞き手の知識の算定が言語形式に影響をもたないことが指摘されている<sup>11), 16), 16)</sup>。つまり、文脈の中における、「相手の領域の状態の算定」の占める機能が言語によって異なるという可能性を示唆しているのである。

## 5. 終わりに

われわれは、言語を使っているいろいろなことができる。しかし、その基本になっているのは、情報の交換である。すなわち、人にこちらの知っていることを教えたり、相手に自分の知らないことを聞いたり、確認したりする作業である。言葉で命令したり、脅したり、警告したりすることも、基本的には、相手に自分の知っている事実や推測、予想、予言などを教えたり、示唆したりすることによって行われる。対話相手との情報の交換のためには、前もって相手の知識を想定しておく必要がある。こちらの想定した相手の知識内に存在しないと想定されるものごとを述べれば相手に新規の情報を伝えることになるし、相手の知識内に存在する物事を述べれば、それは前提となり、その前提からこちらが導き出した帰結としての新規情報を相

手に知らせたり、相手にその前提に注目させることにより、相手がその新規情報を帰結として導き出すことを助けることになる。したがって、聞き手の知識の想定といったことは何語でもしななければならない。しかし、想定された相手の知識の状態といった文脈情報が言語表現にどのように明示しなければならないかが言語ごとに異なる。

一般に、言語表現は、その表現がどのような文脈と親和性をもつかに関する情報を内蔵しているため、われわれは、具体的な文脈を離れた表現でも、その可能な使用文脈を再構成して、ある程度理解することができる。この文脈情報をどのように明示するかは言語によって異なるのである。

たとえば、次の英文は(23)では継起的な動作、(24)では先行文の因果的説明となっている。

(23) He got up late. He missed the train.

(24) He missed the train. He got up late.

日本語では、ある文を先行する文の説明にするためには、「のだ」のような明示的標識が必要になる。(25)は、単なるできごとの継起としかたれず、したがって、まとまりの悪い文となる。

(25) 彼は寝坊した。電車に乗り遅れた。

(26) 彼は電車に乗り遅れた。寝坊した。

(27) 彼は電車に乗り遅れた。寝坊したのだ。

反対に、英語ではそれが現れる文脈の性質を明示的に示すが、日本語では文脈で区別するものもある。たとえば、英語では、反事実仮定文を表す形式があり、ある命題が、その命題が評価されるその時点での現実の状態と矛盾しているか否かを言語形式で示す。日本語では、仮定文の前件が反事実的であるか否かは、形式で示す必要はなく、仮定文が反事実的か否かは、文脈によって決まる(実際には、日本語でも反事実的に解釈しやすい表現は区別できる<sup>27)</sup>。)

(28) If I were a bird, I would fly to you.

(29) もし彼がきていたら、君とけんかになっていたよ。

(30) もし彼がきていたら、これを渡してくれるかい。

また、文がある程度まで、文脈を離れて理解が可能なのは、われわれが、文脈の一般的な構造に関して知識をもっているからであると考えられる。つまり、具体的な文脈が与えられない場合は、デフォルト値を与えられると考えられるのである。このデフォルト値は言語によって異なる場合もある。

たとえば、時計屋で「ちょっときつい」というと緩めてくれるが、英語で“tight”というもっときつくされる可能性があるという(実際には a bit tighter, please といった比較の表現を使う方がよいが)。これは、日本語では、普通は(すなわちデフォルト値としては)根拠となる現在の状態を述べて依頼を行うのに対し、英語では期待する目標状態を述べる、という違いとして考えることができる。

言語学における文脈の理解は、このような文脈情報の言語的表現にもっと焦点を当てなければならないと思われる。このような文脈理解のための言語的表現やデフォルト値の違いとして言語間の差異を説明しようとする試みは始まったばかりであり、まだ、それほど多くのことが分かっているとはいえない<sup>20), 21)</sup>。

付記: 本文の内容・文体に関してさまざまな助言をくださった大阪外国語大の三藤博氏、名古屋学院大の今仁生美氏に感謝する。

## 参 考 文 献

- 1) Halliday, M. A. K.: *An Introduction to Functional Grammar*, Arnold (1985).
- 2) Kuno, S.: *Functional Syntax*, Univ. of Chicago Press (1987).
- 3) 仁田義雄: 現代日本語文のモダリティの体系と構造, 日本語のモダリティ, pp. 1-56, くろしお出版 (1989).
- 4) 仁田義雄: 述べ立てのモダリティと人称現象, 阪大日本語研究, 1号, pp. 31-62 (1989).
- 5) 田窪行則: 語用論, 言語学の潮流, 到草書房, pp. 169-189 (1988).
- 6) 坂原 茂: 日常言語の推論, 東京大学出版会 (1985).
- 7) Brown, G. and Yule, G.: *Discourse Analysis*, Cambridge Univ. Press (1983).
- 8) Schourup, L.: *Common Discourse Particles in English conversation* Garland (1985).
- 9) Deborah Schiffrin: *Discourse Markers* Cambridge Univ. Press (1987).
- 10) 森山卓郎: 応答と談話管理システム, 阪大日本語研究, 1号, pp. 63-88 (1989).
- 11) 田窪行則: 対話における知識管理について—対話モデルからみた日本語の特性, 東アジアの諸言語と一般言語学, 三省堂 (印刷中).
- 12) 白井英俊: 状況理論の立場から, 情報処理, Vol. 27, No. 8, pp. 887-896.
- 13) Sperber, D. and Wilson, D.: *Relevance* Basil Blackwell (1986).
- 14) 坂原 茂: 自然言語理解での論理構造分析に対する言語的知識の役割, 言語の文脈情報処理の高度化の諸問題, 文部省特定研究報告書 代表長

- 尾真, pp. 277-305 (1989).
- 15) 田窪行則: 名詞句のモダリティ, 日本語のモダリティ, くろしお出版, pp. 211-233 (1989).
  - 16) 田窪行則: 対話における聞き手領域の役割について, 認知科学の発展 3, 認知科学会 (印刷中).
  - 17) Dinsmore, J.: The Inheritance of Presupposition, John Benjamin (1981).
  - 18) Dinsmore, J.: 表現と言語理解理論としてのメンタルスペース理論, 認知科学の発展 3, 認知科学会 (印刷中).
  - 19) 金水 敏: 日本語における心的空間と名詞句の指示について, 大阪府立女子大学紀要, 女子大文学 (国文編), 第 39 号 (1988).
  - 20) 金水 敏, 代名詞と人称, 講座 日本語と日本語教育, 第四巻, 日本語の文法・文体 (上), 明治書院 (1989).
  - 21) 金水 敏, 田窪行則: 談話管理理論からみた日本語の指示詞, 認知科学の発展 3, 認知科学会 (印刷中).
  - 22) Fauconnier, G.: Mental Spaces, MIT press 1985, 坂原他訳, メンタルスペース, 白水社 (1987).
  - 23) 神尾昭雄: 談話における視点, 日本語学, Vol. 4, 12 月号 (1985).
  - 24) Kamio, A.: Proximal and Distal Information: a Theory of Territory of Information in English and Japanese, dissertation, Univ. of Tsukuba (1986).
  - 25) 神尾昭雄: 情報のなわばりと日本語の特徴, 日本文法小事典, 大修館書店, pp. 223-244 (1989).
  - 26) 益岡隆志・田窪行則: 基礎 日本語文法 くろしお出版 (1989).

(平成元年 9 月 5 日受付)